

「確かな学び」をつくる言語活動の工夫

～第5学年「100年後のふるさとを守る」の実践から～

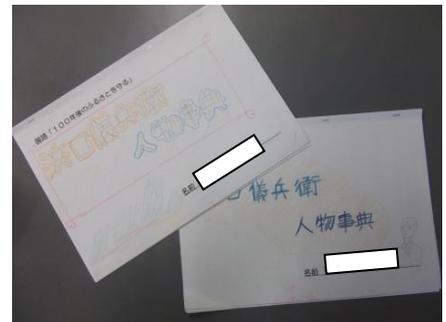
五泉市立川東小学校 教諭 浅間 一城

1 目指した子どもの姿

本実践で扱う教材「100年後のふるさとを守る」は伝記である。意欲的に読書に取り組める児童は多いが、伝記に興味・関心をもって進んで読んでいる児童は少ない。伝記に描かれる人物は、その生き方、考え方がすばらしく、自己と照らし合わせて読んだときに、多くの学びをもたらしてくれるものである。しかし、伝記から児童が離れてしまう要因がまさにここにある。つまり、登場人物と自己を結び付ける接点を、児童が見いだせないということである。本教材を通して、伝記を読む視点とともに、そこに描かれた人物と自己の結び付け方を学ばせていきたい。そして人物のすばらしいと思う行動について話し合うことを通して、人物の行動に価値付けをしたり、生活場面と関連させたりして、自分の考えをもち表現できる児童の姿を目指す。

2 具体的な手立て

- (1) 誰が、いつ、どこで、どのような考えから、何をしたのか、それを筆者はどう考えたのかを、読みの視点として提示することで、教材から入ってくる多くの情報を、整理して読めるようにする。
- (2) 上記の工夫とリンクさせながら、単元を通して、人物事典（ワークシートとして併用）を作成していくことにより、収集した情報を整理しやすくするとともに、伝記を読むことに対する関心・意欲を高めるようにする。
- (3) ウェビングマップを使い、人物の行動→価値付け→自身の具体的場面へと関係付けながら登場人物と自分を結び付けて考えられるようにする。
- (4) 人物事典の最後に「私が儀兵衛から学んだこと～高学年として自分の生き方をみつめて～」に考えを書かせる。その際、取り入れたい儀兵衛の考え方や行動、その価値、自身の具体的場面と、順を追いながら関連させて書くことと、一定以上の字数で書くことを評価の視点として明示する。



人物事典

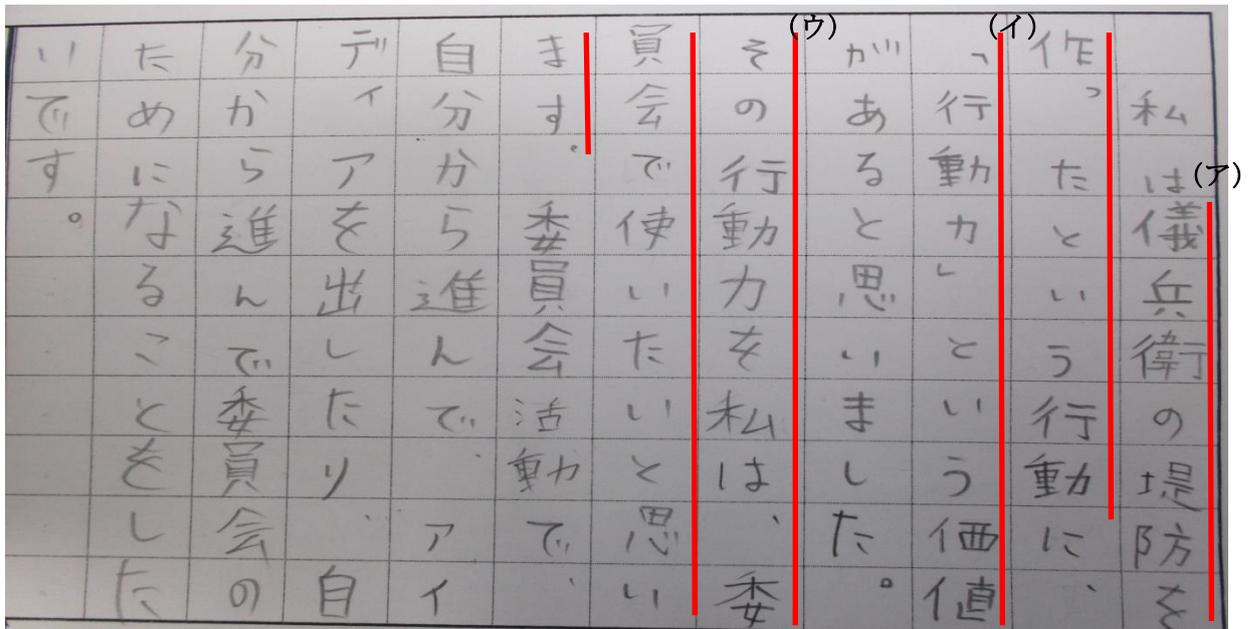
3 授業の実際

- (1) 単元目標
 - ・ 「伝記」という文章や、そこに描かれた人物の人生に興味をもち、進んで読もうとする。（関）
 - ・ 自分の経験や考え方と照らし合わせて、描かれている人物や出来事について、考えをもつことができる。（読）
 - ・ 学んだことや読み取ったことから、目的や意図に応じて書くことができる。（書）

(2) 授業の実際

①読みの視点を明確にした人物事典

年号を手掛かりとし、人物にかかわる出来事とその時の主な行動を、人物事典の年表にまとめていった。教材自体に使われている言葉が、児童にとって難しいものも多く、読み取ることになり困難が伴うと予想していた。



4 実践の成果と課題

(1) 成果

①読みの視点を明確にし人物事典に年表としてまとめさせたこと

読みの視点を示したことで、児童は教材の文中の何に注目して読めばよいのかが明確になり、自力、または友達と共に教材文を読み進めることができた。また読み取ったものを年表の形でまとめたことで、時系列での出来事やその時の登場人物の行動が整理され、教材文の内容の理解を深めることができた。

②評価の視点を明示し、まとめを書かせたこと

何について、どのような順番で、どのくらい書けばよいのかを具体的に示したことで、85%以上の児童が、概ね満足できるまとめを書きあげることができた。ウェビングマップに、書く材料が整理されていたことも、自分の考えを書く上で有効であった。

(2) 課題

登場人物と自分を結び付けるために、ウェビングマップを活用した。ここで大きな2つの課題があった。1つ目は、登場人物の考え方や行動に対する価値付けである。価値を表わす語彙が豊富にあるわけではない状況で、適当な価値付けの言葉が見つからない児童がいた。そのために、それぞれのウェビングマップを自由に見て回る時間を設けたが、それほど有効な手立てとはならなかった。2つ目は、自分の具体的場面につなげるところである。学校生活場面と限定したことで、児童の発想が制限されてしまい、登場人物と自分を結び付けることに困難さを感じている児童が多数いた。

今回の実践では、思考ツールとしてのウェビングマップが、情報や考えを整理し、登場人物と自分を結び付けるための大きな手立てであった。情報や考えが視覚的に整理され、互いの考えを共有する点では有効であったと考える。しかし、それをもとにかかわらせる手立てが不十分だったことや、ウェビングマップをつなげ広げていくことに大きなハードルがあったことなどが課題として残った。自分の考えをもち表現できる児童を目指すために、思考ツールをどの場面でどう取り入れていくのか、今後も研究をすすめていきたい。